

序

画像診断は苦手なので誰かに任せてしまいたい。そもそも国家試験の画像問題も嫌いだった。そう感じている人も多いのではないでしょうか。確かに医療安全を考えるとスペシャリストに委託した方がよいに決まっています。しかし現実問題としてわが国の放射線科医の人口あたりの数は欧米の半分以下しか存在しないのが実情です。そうするとすべての画像検査にレポートがついてくる、という理想的なシナリオは想定困難です。ましてや夜間・週末の緊急検査では放射線科医に意見を求めるることは困難をきわめることでしょう。もちろん人工知能（AI）の実用化により状況が改善する可能性は残ってはいます。しかし実情として研究は期待したほどには進んでおらず、下手をすると第三次AIブームも夢幻に終わってしまう可能性も危惧されます。

このように理想と現実の大きな乖離を考えると、安心安全の医療を遂行するためには可能な限り多くの医師が画像に慣れ親しんでおく必要があります。最低でもキーとなる所見については拾えるように鍛錬を積んでおく価値があります。ただこれを試行錯誤による独学で乗り切ることは不合理です。可能な限り体系的に画像診断を身につけられるよう平易な使いやすい教材が必要とされています。本書はそのような初学者に向けて、画像所見を見てから診断をつけるまでの道筋がわかるようデザインされています。特に救急の現場では判断が急がれますので、それら疾患の診断につながる所見を中心に編集してあります。内情を言いますと当初、本書は救急に軸足を置いた企画からスタートしています。目次を見てもうとわかりますように随所に「救急」という言葉が出てくるのは、それが理由です。

一方で昨今の報道で話題になっているように画像診断報告書には偶発所見や陰性所見も含まれております。これらを丹念に拾い上げて読影レポートを完成させることは大変骨の折れる作業です。画像から得られる情報を網羅的にカバーする公文書ですので片手間にチャレンジできる代物ではありません。本書はそのような専門家に向けたものではありません。随所に大幅に単純化された記載も存在します。この点はご了承を願いたいと思います。執筆者は日本中のエキスパートに声をかけて募りました。従いまして地域的なバイアスは最少化してあると自負しています。ぜひ一度は通読されることをお勧めいたします。それでは、どうぞ本書をお楽しみください。

2018年7月

京都府立医科大学大学院 放射線診断治療学講座
山田 恵